

第三回地域研究コンソーシアム賞 受賞者発表

地域研究コンソーシアム事務局

地域研究コンソーシアム(JCAS)は、その規約において「国家や地域を横断する学際的な地域研究を推進するとともに、その基盤としての地域研究関連諸組織を連携する研究実施・支援体制を構築することを目的とする。これにより、人文・社会科学系および自然科学系の諸学問を統合する新たな知の営みとしての地域研究のさらなる進展を図る」と述べ、それに続いて(一)共同研究の企画・実施・支援、(二)海外研究拠点の設置運営と国際的な共同研究・臨地研究の企画・実施、(三)研究成果の国内外への発信・出版、(四)地域研究情報の相互活用・共有化と公開という具体的目標を掲げています。

地域研究コンソーシアム賞は、上記の目標を達成する上で大きな貢献のあった研究業績、共同研究企画、そして社会連携活動を広く顕彰することを目的として授与されます。研究業績を対象とする「研究作品賞」、若手研究者の研究業績を対象とする「登竜賞」、シンポジウムなどの研究企画を対象とする「研究企画賞」、社会連携活動を対象とする「社会連携賞」の四つの部門によって選考を行い、毎年秋に行われている年次集会で受賞者を発表・顕彰しています。

地域研究コンソーシアムの詳細についてはウェブサイト <http://www.jcas.jp/> を、地域研究コンソーシアム賞については <http://www.jcas.jp/about/awards.html> を参照ください。

第三回（二〇一三年度） 地域研究コンソーシウム賞 審査結果および講評

地域研究コンソーシウム賞（JCSA賞）の授賞対象作品ならびに授賞対象活動について同賞審査委員会の審議結果を発表する。

今回の募集に対して、研究作品賞候補作品八件、登竜賞候補作品六件、社会連携賞候補活動三件、研究企画賞候補活動六件の推薦があった。研究作品賞の候補作品については第一次審査によって選抜された作品二件、登竜賞については三件、社会連携賞は三件、研究企画賞については三件の候補作品・活動を本審査委員会での審査対象とした。これらはすべて第一次審査を経て推薦されたものである。各委員の活発な議論と慎重な審議の結果、それぞれの部門について以下の作品あるいは活動を授賞対象として選出した。

受賞された四氏には、委員会を代表して心からの祝意をお伝えしたい。以下は、各賞の授賞理由ならびに授賞作品・活動に対する講評である。

● 研究作品賞授賞作品

島村一平著

『増殖するシャーマン——モンゴル・ブリヤートのシャーマニズムとエスニシティ』（春風社、二〇一二年）

中溝和弥著

『インド 暴力と民主主義——一党優位支配の崩壊とアイデンティティの政治』（東京大学出版会、二〇一二年）

● 登竜賞授賞作品

山本達也著

『舞台の上の難民——チベット難民芸能集団の民族誌』（法蔵館、二〇一三年）

● 社会連携賞授賞活動

該当なし

● 研究企画賞授賞活動

田畑伸一郎代表

「ユーラシア地域大国の比較研究」

二〇一三年一〇月一六日

地域研究コンソーシウム賞審査委員会

委員長・長崎暢子

委員・高木正洋・西村成雄・二村久則・家田修

島村一平著

『増殖するシャーマン——モンゴル・ブリヤートのシャーマニズムとエスニシティ』

中溝和弥著

『インド 暴力と民主主義——一党優位支配の崩壊とアイデンティティの政治』

研究作品賞の二作品に関しては、獨創性という点でともに優れた作品であるとの認識で、審査員の見解が一致した。選考においては、非常に多くの時間を費やして、どちらがより優れているかが議論されたものの、最終的にどちらか一方に絞り込むことはできなかった。仮にどちらかの作品を受賞作品としたとしても、その差はごくわずかなものとなることから、審査委員全員の総意として、二作品に研究作品賞を授与することとした。

島村氏の著書は、モンゴルの少数民族であるブリヤートの人々のなかで近年隆盛を見せているシャーマニズムを取り上げ、それを近代以降に余儀なくされた国境による民族集団の分断や、大規模粛正の過去と密接に関わったルーツ探求運動として描いた民族誌である。

本書は、空間的には、モンゴル、ソビエト、中国にまた

がり、時間軸として、社会主義成立以前、社会主義からポスト社会主義の時代までカバーし、ある国、ある民族を固定的に論じるのではなく、トランスナショナルな視点から流動する社会的・文化的ダイナミクスを描き出している点で高く評価できる。また、エスニシティの研究として、人類学に止まらず、社会学や歴史研究への目配りもおそろかにされてはいない。

シャーマニズムを、単純な宗教論ではなく、現代の宗教の問題に内在的、客観的に迫りつつ、「自然環境や生業、政治・社会的状況によって変化する『不可知の存在』と人間のあいだにおける象徴的な交換の体系」と明快で新鮮な解釈をもって再提示した点も評価される。加えて本書は、死と生との関係を整理する必要があるという問題がクローズアップされる契機ともなり得た。

さらに本書は「読み物」としても優れている。これは本書を成り立たせているフィールド研究が、極めて詳細かつ正確な観察に立脚している点に負うところがあり、そのこととはとりもなおさず当該研究の質の高さを示唆するものと言える。また調査活動の中で表れる呼称や言語表現の意味解釈への慎重かつ深い洞察からは、独自で注目に値する研究スタイルもうかがわれた。

以上より島村作品は、今後の地域研究のあり方を示す重要な視点と新しい領域を提示しており、研究作品賞に相応

しいと評価する。

中溝氏の著書は、宗教暴動を政治学の立場から、政治変動とくに政党政治と選挙過程に関する体系的分析を通して、暴力の政治的帰結という主題として捉えた作品でありながら、一〇年以上にわたる現地調査ではビハール州に焦点をあてた暴動に関する豊富なインタビュー調査を用い、ローカルな制度分析とともに地域研究として価値あるモノグラフに結実している。本書のとくに優れている点は、第一に、政治学だけでなく、社会階層、社会運動論の方法も駆使し、社会階層とカースト分析とを組み合わせて宗教動員モデルを構築し、これによって宗教と暴動をインドの政治社会構造の変容によって説明しようとした点にある。さらに、社会階層分析をより精緻化するために、カースト制度の流動性に着目したこと、現代インドの権力構理解には二〇世紀初頭に遡って歴史的視座も持ち合わせているところも評価される。

第二に、政治変動をたんに政治的な要因のみで説明するだけではなく、緑の革命の導入によってビハール州農業の経済状況が改善され、それに伴って同州の社会・経済的階層構造も次第に変化していったという経済的要因も政治変動の媒介変数として用いた点が挙げられる。この経済的変化によってカースト制度にも影響が及び、それがひいては

カースト制度と政党構造の関係を変化させる結果をもたらしたという分析は理論的で説得力がある。

そして第三に、本書の主要な分析枠組みの一つである「暴動への対処法」の、一次資料を中心とした豊富なデータに基づく精緻な検証である。このアプローチは、インドにおける政治的暴力を、先行研究のように暴力の原因を探るのではなく、その政治的帰結の分析を通じて暴力の克服までを見据えるという、民主主義と暴力の関係を新しい角度から捉えた斬新な研究である。

以上により中溝作品は、地域研究に政治学を適用する場合の新しい可能性を示したものとして高く評価され、研究作品賞に相応しいものである。

山本達也著

『舞台の上の難民』

——チベット難民芸能集団の民族誌』

本書は、チベット難民の芸能集団を対象とするフィールドワークを通じて、ディアスポラ的な生に揺れつつも、チベット・ナシヨナリズムを体現する存在として生きるチベット難民を活写したものである。本書で語られるチベット・ナシヨナリズムはイデオロギーではなく、生身の人間の営みである。

本書がJCAAS賞の登竜賞として評価されたのは、まずテーマ設定の巧さである。地域研究コンソーシアムは地域を越え、学際的に対象に迫る研究を奨励しているが、本書はこの趣旨にふさわしく、中国とインドという二つの地域のはざまで生きる、あるいは世界を旅するチベット芸能楽団を取り上げ、その現代性を内側から描き出している。わけても本書が高く評価されたのは、内在的視点である。著者は研究対象であるチベット難民芸能集団の一員に加わり、いわゆる「参与観察」を超えて、傍観者に留まっていたのでは決して得られない知見を数多く提示する。しかも全体を物語として読み込める作品にまで仕上げた。さらに、研究対象との距離を保つため、「言説分析」手法を

用いて叙述の客観性を担保しようとした。本書は地域研究の新しい可能性に挑戦した点で登竜賞に相応しい。

ナシヨナリズムの語り方も、確信的なナシヨナリストを登場させるのではなく、多様な選択肢の中で揺れる人間への親近感をもとに、その揺れを揺れとしたままナシヨナリズムを描いたのも評価できる。また、その揺れが著者自身の心情の現れでもあるという自己分析も、明確になされている。もつとも、著者が本書の叙述において客観性を常に保ち続けることができたかという点、後で述べるような留保をつけざるをえないが、それを差し引いても、チベット難民の現在を独自の視点から描いた力量は登竜賞に値する。

審査委員会は著者の将来性を高く評価しつつも、他方で、叙述に粗削りな面も見られるなど、以下、審査の過程で指摘された課題を率直に記すが、それは本書の著者に対してだけでなく、後に続く若手研究者にとっても他山の石としていただきたいからである。

まず、本書が芸能集団を取り上げ、音楽を叙述の素材とした以上、何らかの形で、たとえば、楽譜を入れるなど、音が読者に聞こえてくる工夫が必要だったのではないかと。また、伝統的なチベット音楽と比べて、本書が描くチベットポップはどこが違うのか。チベットポップはインドや中国のモダンポップとどこが違うのか。人を描くと同時に、その描く対象が表現手段としてある音楽そのものを読

者に伝えることは、必須だったと思われる。

二つ目は研究対象との距離感である。チベット難民という研究対象に徹底的に溶け込み、自他の区別が無くなるどころまで埋没したことは、本書の誕生にとって不可欠だった。しかし、研究書として本書を叙述する際には、チベット難民を取り巻く状況との距離を客観視することが必要だったのではないか。すなわち、著者はチベット問題を扱う中国側の研究を「批評に値しない」として切り捨ててしまっているが、研究書としては中国側のチベット問題研究に正面から向き合う必要がある。本書がダラムサラでチベット難民向けに出版されたのならともかく、日本の読者を前提にしている以上、無条件に、まずチベット独立ありき、という立場は、乱暴に過ぎるのではないか。チベット難民の主体性に注目し、さらにそこに参加した著者自身の立ち位置も含めて分析するという著者の意気込みは高く評価できるが、そこから直線的に、中国側の研究を「批評に値しない」としてしまう態度には、再考の余地がある。本書では、チベット文化についてラサ中心主義を批判する視点が、また、先行研究についても独自の整理をしており、その点も評価できるので、今後、著者が複眼的視点を持ってチベット難民問題を広い立場から考察してくれることを期待したい。ラサ、中国、インドの視点、あるいは、他の地域の難民と比較する視点などを取り入れて、本書の

著者しかできない広い視野からのチベット難民論を展開していただきたい。

以上のようにいくつか注文もあるが、著者には、今の若手研究者にありがちな「早熟老成」ではなく、本書で見せたような、徹底的に対象に迫る情熱を失うことなく、今後さらに研鑽を積んで、新しい地域研究の可能性をさらに切り拓いてほしい。

社会連携賞

該当なし

今回、推薦された活動のうち二件は誰でも視聴できる形での映像作品であり、地域研究に普段触れることの少ない一般の人たちにとって、地域理解の契機の一つとなっている点は、注目すべきである。ただし映像作品ではない他の一件も含めて、いずれの活動も、地域研究という視点からの問題意識は希薄で、地域が抱える問題への掘り下げが不足している点是否めず、審査委員会としては、今後、映像やその他のメディアによる社会連携の可能性を期待しつつ、本年度の受賞者は該当なしとすることとした。

田畑伸一郎代表

「ユーラシア地域大国の比較研究」

本企画はロシア・中国・インド等のユーラシア地域大国について、さまざまな側面から比較検証を行うプロジェクトである。成果面では、比較軸に基づく総合的、かつ内在的理解をめざした新たな歴史認識のプラットフォームの構築がなされようとしている。その意味で、現代において経済的なプレゼンスを高めるロシア、中国、インドを地域大国と位置付けて比較することによって、地域の特殊性や固有性を見いだすことを得意とする地域研究者が、あえてそれらの国々をもつ一般性・普遍性の解明に挑み、中軸国（先進国）認識とならぶ新たな基軸としての経済・政治モデルの提示を試みている点は、日本における世界認識を拡大し、大きく転換するうえでインパクトを持ちえている。

また、地域研究諸機関の学際的連携体制の構築、国際シンポジウムの開催や外国人研究者の招聘などの国際的研究交流の展開、公募研究の採択やプロジェクト研究員の採用等による研究支援体制の構築、論集刊行による成果の対外公開を通じて地域研究を推進させた点は、今後の地域研究にインパクトを与える業績と言えよう。

研究企画としての広範さは、経済的発展論・統治モデル

論・国際秩序論・近代帝国論・越境論・文化的求心／遠心力論の六大イシューとして示され、現在時点で最初の二冊が出版されている。どのイシューもきわめて意欲的に学問的挑戦を試みており、今後ユーラシアプレートに乗っている諸地域を理解する新たな「支点」を提供している。と同時に、日本の立ち位置に関する再検討と再定義が、ますます必要となつていることを明示的に提起している。まさに、北米プレートにも乗っている日本の二一世紀世界における歴史的空間的位置を考えるべき新しい眺望を提供しているといえよう。

もちろん、この企画が地域研究領域の独自の、そして普遍的な課題追求に十分であるということではなく、今後さらに世界に開かれた日本における成果として、ロシア・インド・中国のみならず欧米などの学会における国際的発信とそこでのインターアクションが期待されるだろう。

受賞者紹介

研究作品賞



島村一平
(しまむら・いっぺい)

滋賀県立大学人間文化学部准教授。専門は文化人類学・モンゴル研究。早稲田大学を卒業後、テレビ番組制作会社に勤務。取材で訪れたモンゴルに魅了され退社、一九九五年にモンゴルへ留学する。モンゴルでの滞在は延べ六年に及んだ。一九九八年モンゴル国立大学大学院修士課程修了、二〇〇四年総合研究大学院大学単位取得退学。博士文学。モンゴル系の少数エスニック集団のシャーマニズムについてナシヨナリズムやエスニシティとの関係から考えてきた。現在は、モンゴルにおいて地下資源開発による遊牧社会の変容について調査中。

研究作品賞



中溝和弥
(なかみぞ・かずや)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科准教授。博士(法学)。東京大学大学院法学政治学研究科博士課程単位取得退学。インド・ジャワハルラー・ネルー大学留学、人間文化研究機構研究員などを経て、二〇一三年より現職。暴力と貧困の解決をライフワークとし、民主主義がこれらの課題を解決する可能性について、インドを中心とする南アジアを拠点に研究を進めている。今回の受賞作では、二〇一二年に第二回アジア・太平洋賞特別賞を受賞した。

登竜賞



山本達也
(やまもと・たつや)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科附属「現代インド研究センター」客員研究員／NIHU研究員。文化人類学・インドおよびネパール在住チベット難民の研究。二〇〇九年三月京都大学大学院人間・環境学研究科より博士(人間・環境学)取得。近年は、チベット難民によるポピュラー音楽の制作と消費、流通等からチベット難民若年層の社会参加の様態や彼らのネットワークの様態を明らかにするとともに、自らもその過程に参入している。

研究企画賞



田畑伸一郎
(たばた・しんいちろう)

北海道大学スラブ研究センター教授。専門はロシア経済、比較経済体制論。東京大学教養学部卒業、一橋大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得退学。一九八六年にスラブ研究センター助教、一九九七年から現職。二〇〇四年から二年間、スラブ研究センター長、二〇一二年から北海道大学ヘルシンキオフィス所長兼任。ロシア・マクロ経済の統計分析をもっとも得意とするが、近年は、ロシア極東経済、日ロ経済関係などにも取り組んでいる。